笑われたって いいじゃないか

三好京三

のびのび人生論 24

笑われたって いいじゃないか

三好京三

のびのび人生論 24

のびのび人生論 24　笑われたっていいじゃないか

1984年7月　第1刷 ©

定価 900円

著　者　三好京三（みよし　きょうぞう）

発行者　久保田忠夫

発行所　株式会社　ポプラ社

160 東京都新宿区須賀町5　振替東京 4-149271

印　刷　新興印刷製本株式会社・有限会社トラヤ印刷所

製　本　富士製本株式会社

N. D. C. 159／238 p／20 cm

8012－086024－7764

はじめに

わたしは長じてから小説家としての勉強の主要な部分を、丹羽文雄先生の小説集と、『小説作法』という手ほどきの本によってやらせていただいた。

『小説作法』（文藝春秋社刊）の冒頭には、つぎのような文章がある。

「……生ま生ましい、ごちゃごちゃした覚書があれば、その作者の小説つくりの楽屋がさらけ出されることになる。ひとには面白かろうが、作者自身にとっては、いやなことである。或る時……編輯者がその（小説の）覚書をあとでくれと言った。とんでもない。小説を書きあげたあとだから、死恥だが、死恥をさらすようなものである。……その死恥を、いま私はさらそうというのだ。……私はそれとは（人の書いた小説作法とは）ちがう小説作法を書きたい。そのためには死恥も生恥もさらさなければならない始末になった」

この丹羽先生のさらしてくださった「死恥、生恥」が、わたしにはたいそうべんきょう

になった。

これにあやかろうというのはたいへんに不遜であるが、わたしも幼児期、少年期のことを書くにあたり、生恥をさらそうと思った。

よく世の中では、栴檀は双葉よりかんばし、とか、あの人は才能があるとかいわれる。たしかにそのような人もあろうが、おおくの人は、天賦の才能よりも、のちのちの努力によって成功をかちとっているのである。そして人間、なろうと思えば何にでもなれるものだ。なれないのは、なろうと思う気持ちがよわいからである。

わたしは中学二年生で小説家をこころざした。才能があったかといえば、それがまったくと言っていいほどになかったことが、当時書いたものをみてわかった。発表するのは気恥ずかしい。しかしあえてそのままうつしとった。

今、中学生、高校生はよく言われないことがおおい。しかし今のおとなが、昔、それほどりっぱだったのか。わたしはこのように情ない甘ったれ少年で、なのにひたすら作家をこころざすような、おかしな少年であったということを諸君の前にさらけだし、そのことで、諸君にも自信をもってもらいたかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

昔の文章をうつすたびに気恥ずかしい。わめき声をあげたいほどの生恥である。しかし耐えた。いい気な、あらっぽい、ひとりよがりな文章。それでも作家にひたすらあこがれた人間がいた。

努力はしなかった。ただっ子のように作家にあこがれただけである。しかし、はやい時期に目標をもったことだけはよかったと今は思っている。

「少年よ、野望的であれ。人に笑われたってかまわないではないか。野望がつらい人生をかろうじてささえてくれることだってあるのだ」

わたしはそう君たちに言いたい。

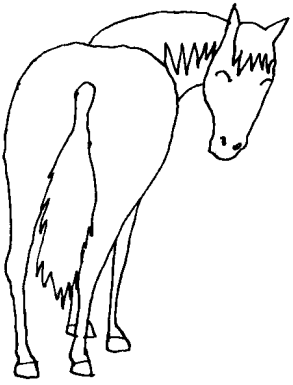
今の少年たちは恵まれすぎている、甘ったれだ、覇気がない、三無主義だ、五無主義だといった声がかしましいが、大昔から、人間の本質がそう大きくかわったという例はない。今の少年たちは、今の少年たちなりに、けんめいに時代に対応しつつ生きていると思うのである。そして心の底で、必死によりよい生き方をさがしているのは、今も昔もかわりはない。

笑われたって
いいじゃないか

もくじ

はじめに
8 幼年時代
23 小学一年生
41 つづり方
68 学芸会
94 将来の希望
110 落後
118 文章家希望

129 日記
150 文学仲間
165 文弱の徒
183 同人雑誌
209 まどい
222 焦躁
あとがき



表紙画・挿画――長尾みのる
デザイン――堀木一男

笑われたっていいじゃないか

幼年時代

きかん気だった。気にいらないことがあるとすぐに石を投げた。だから男友だちは、

「久雄ちゃんはおっかねえ」

と言い、女の子たちは、

「きかん坊だ」

と敬遠した。

そのくせ、泣き虫である。家に祖母がいないと、すぐに、

「祖母ちゃんがいねえ」

と泣きだした。祖母がそばにいないとかた時もおさまらない。祖母にだかれ、乳のでないおっぱいを吸っているときが、もっとも安心だった。祖父や母が、

「そんなしなび乳っこをさずって」

と眉をひそめるが意に介さない。祖母はトミと言い、祖父にとっては二度目の妻であっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

た。子どもは生んでいない。そのせいなのかわたしを溺愛した。
きかん坊だから、家の中でも粗暴なふるまいがおおかった。短気な母親がそのようなわたしをなぐろうとすると、
「久雄ちゃんをはたくのなら、おらをはたかえ（たたきなさい）」
と盾になった。だから、いかにいまいましくとも、祖母がいるときは、母はわたしをなぐれない。わたしにとって祖母はいつくしみに満ちた最高の庇護者であり、それにひきかえ、母は狂暴な加害者であった。祖母がいないときだってあるわけだから、そういうとき、わたしは思うさま母になぐられた。だから、母にたいしては愛とかしたわしさはまったく感じず、おそればかりをいだいていた。
母がなぜそのように狂暴になりやすかったかといえば、わたしのきかん坊ぶりもさることながら、わずか一週間のうちに子どもの久三と夫の久作を亡くし、貧乏のどん底におちいって、光明のない道をはいずりまわっている気持ちだったからであろう。
その不幸は、昭和十年の一月にやってきた。わたしが満五歳になる二か月ほど前のことである。一月二十日、うすぐらいわたしの家の八畳間には、母の友人たちがあつまって、

こたつで久三をだき、涙をながしている母をいたましげにみていた。久三は肺炎だったらしい。久三という名は、久作の三男のようであるが、実はそうではない。わが佐々木家には久悦という男の子が一番先に生まれた。

しかし生後一か月、母の乳房で圧死するという事故があって、男として二番目に生まれたわたし、久雄が跡とりということになった。そのつぎが静男である。久悦のつぎには久子という姉が生まれている。静男の下が久三であった。戸籍上は四男ということになる。

しかしはやくに久悦が死んでいるので、それは勘定にいれず、三番目の久作の男の子、というような意味で久三としたのであろう。

久三は母の胸のなかで、すでに虫の息であった。母は声をださずに涙をながしつづけていた。

「キクヱさん」

と母の友人の一人が言った。

「おらも、そうしてだいて逝かせた。あんたもそうするんだ」

医者はすでに見はなしたのであろうか、その場には居あわせなかった。

わたしの家は茅葺きであった。八畳間の南側の屋根が長方形にくりぬかれ、そこに明りとりのガラスがはめこまれていた。その窓は台所のある板の間の天井にもあった。

しかし町なみの中にたがいの家がきゅうくつに軒をならべているので、南側も北側も庭なしですぐに隣家となっている。だから採光はいちじるしくわるかった。明りとりの窓があっても八畳間がうす暗いのはそのせいである。しかも雪がふって窓に雪がつもると、家の中は暗黒といっていいほどに暗くなった。

暗い八畳間で、母にだかれたまま久三は息をひきとった。わたしは祖母にだかれ、弟が死ぬのをじっとみつめていた。

それから六日後の一月二十六日、こんどは父の番であった。父は粟粒結核という、肺結核の中でもたちがわるいといわれる病気にかかっていた。入院するお金がなかったのか、あるいは入院してもなおる見こみがないからか、父は自宅療養をしていた。結核は、このころはまだ不治の病といわれていた。

実は、結核にかかったのは父一人ではなかった。父には久治という九歳ちがいの弟がいたが、その久治が父よりも先に病気になり、裏の離れ屋で療養をしていたのだった。父が

結核になったのは、その弟の看病をしたためだとも言われている。弟思いの父は、喀血でよごれた久治の寝巻や下着を、よく洗濯してやっていたという。

うつされた父の方が、急速に病勢がすすんだ。そして、母屋で寝ていた父は弟とかわって離れ屋に寝るようになった。そして間もなく、危篤状態となったのである。

一月二十六日の午前十一時ごろ、離れ屋には身内や近所の女たちがあつまり、声をあげて泣いていた。わたしは例によって祖母にだかれ、父の枕元にいた。父は髪をながくしていた。仲のよい叔父が床屋だったこともあり、農家にはふさわしくない髪にしていたのかもしれない。

もっとも父は農業をやっていたわけではなかった。わたしの家は田畑をもつ農家である。しかし、それを耕すのは祖父の久右衛門、祖母のトミ、そして母のキクヱのやくわりであった。父の久作は荷馬車ひきをした。以前は久右衛門がひいて駄賃かせぎをしていたのである。

久作は、やがて荷馬車ひきにあきたりなくなった。そして馬車をフォードのトラックにかえた。たった一台のトラックながら、馬車屋は運送店になったのである。

しかしこれが裏目にでた。トラックが転落事故をおこしてやとっていた運転手が死に、それの補償をしなければならなくなった。トラックはつかいものにならないくらいに大破してしまった。運送店は開業二年ほどでたちまち荷馬車屋に逆もどりである。トラックを買った借金もまだ返していなかった。その上、月づき、死んだ運転手の家に金をおくりつづけなければならない。

家運ははっきりとかたむきはじめていた。そこへ追い討ちのように久治の発病、そして久作の罹患である。荷馬車は久右衛門の前の妻の実家から、勝郎という男がとまりこみで手つだいにきて引いてくれていた。

しかし以前とちがい、借金返済、運転手の補償、二人分の療養費と、物いりはかさむ一方である。

傷心の中で久作は臨終をむかえていた。頭がよく、たいそう筆がたったという。どうしても農学校に通いたくて、祖父にかくれて試験を受けたが、頑固でしまつ屋の祖父は、合格通知がとどいても息子を農学校に通わせなかった。一人だちしてからトラックを買ったのは自らの意志をとおした結果ではあったが、それは失敗に終わった。悲運のまま、父は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c